

## 【2】学級定員について

### 調査項目

0. 学校番号（別紙参照）を記入してください。
1. 基本調査
- 1-1. 学校種を教えてください。
- ①幼稚園 ②小学校 ③中学校 ④高等学校 ⑤中等教育学校 ⑥特別支援学校 ⑦義務教育学校
- 1-2. 常勤教員数を教えてください。管理職も含まれます。
- 1-3. 非常勤教員数を教えてください。
- 1-4. 特別支援学校は障害種別を選んでください。（複数選択可）
- ①視覚障害②聴覚障害 ③肢体不自由 ④知的障害 ⑤病弱 ⑥その他
- 1-5. 複式学級の有無についての質問です（特別支援学校を除きます）。ある場合は、学年構成、学級定員を記してください。無い場合は「0」を記入してください。
- 1-6. 特別支援学級の有無についての質問です（特別支援学校を除きます）。ある場合は、学年構成、学級定員、通級の状況等を記してください。無い場合は「0」を記入してください。
- 1-7. 各学年における、「1-5」「1-6」以外の、通常の学級の「学級数」を記入してください。
- 1-7-1. 幼稚園は、年少、年中、年長の学級数を、下の学年から「半角数字カンマ区切り」で記してください。該当がない学年には「0」を入れてください。
- 1-7-2. 小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、義務教育学校は、各学年の学級数を、下の学年から「半角数字カンマ区切り」で記してください。
- 1-7-3. 特別支援学校は各学部の学級数を、下の学年から学部名と共に「半角数字カンマ区切り」で記してください。
- 1-8. 各学年における、「1-5」「1-6」以外の、通常の学級の「学級定員」を記入してください。
- 1-8-1. 幼稚園は、年少、年中、年長の学級定員を、下の学年から「半角数字カンマ区切り」で記してください。該当がない学年には「0」を入れてください。
- 1-8-2. 小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、義務教育学校は、各学年の学級定員を、下の学年から「半角数字カンマ区切り」で記してください。
- 1-8-3. 特別支援学校は各学部の学級定員を、下の学年から学部名と共に「半角数字カンマ区切り」で記してください。
- 1-9. 幼稚園で満3歳受け入れや、預かり保育をされている園は、その状況（人数、時間など）を記してください。

### 概要

定点調査として、現在の教員数、学級数、学級定員を集約し、校種ごとに、学級数に対する常勤教員数、非常勤教員数の分布を示した。また、各学年の学級定員の分布及びその平均値も示した。学級数と常勤教員数とは全体的に正の相関を示すが、幼稚園は若干弱めであった。学級定員は、幼稚園では園により2倍近い差があったが、小学校では概ね30～35、中学校では概ね35～40に収まっていた。

本調査の中心テーマの一つである「望ましい学級定員」について調査を行い、学級定員の、「現時点」での平均値と「望ましい」平均値とを、校種、学年ごとに整理したものを下表に示す。

学級定員	年少	年中 ・長	小1 年	小2 年以上	中学 校	高等 学校	中等 教育	義務 1年	義務2 年以上
「望ましい」平均値	16.0	21.5	25.2	26.4	29.2	34.9	31.3	23.0	25.1
「現時点」の平均値	22.7	28.2	33.5	34.1	36.5	40.0	37.5	33.0	33.4

全体を通じて「現時点」が「望ましい」を5～8名上回っているが、特に小学校、中学校では7～8名と、上回り感が強いことが分かる。「望ましい」根拠として、授業指導や生活指導、学級経営といった教員の本務に対する不具合が実感として多く選ばれていた。また、学齢が低くなるとを考えた場合、現行の学級定員は多すぎるというのが教員の実感のようだ。また、「保護者と丁寧に向き合うことができる」「子どもたちの幸せに寄り添うことができる」は幼小中では比較的選択されていた。

特別支援学校は学級編成が他校種とは異なり、手厚い指導体制が取られているが、子どもによる違い、実習対応等の業務の増加傾向もあり、現場の状況に応じて、学級定員を柔軟に調整できる体制への要望が多く上げられていた。

校種に特化した状況であるが、幼稚園においては、3分の1程度の園が年中児以上の募集をしない完全3年保育となっており、3歳児学級が無い園も3園あるなど、他校種に比べて少子化の影響が大きい。関連して、満3歳児受け入れについては2園、預かり保育実施については9園から実施状況についての報告があった。複式学級は小学校より6校、特別支援学級は小学校5校、中学校5校について、状況の報告があった。

令和5年度全附属調査委員会実態調査報告

【2】学級定員について

1. 「1. 基本調査」の校種別整理

「基本調査」はその性質上、校種による違いが大きい。また、同じ校種内における、自校園の立ち位置を知ることは、勤務等の環境改善を考える上での第一歩となるので、「幼稚園」「小学校、中学校」「中等教育学校、高等学校、義務教育学校」「特別支援学校」4つの区分に整理して情報提供を行う。

※回答の中に「年長2学級、学級定員50」のようなものも散見されたが、「年長2学級、学級定員25(学年で50)」などと、解釈できる範囲で手直しして集計した。

1-1. 幼稚園

- 1-1. 学校種を教えてください。
- 1-2. 常勤教員数を教えてください。管理職も含みます。
- 1-3. 非常勤教員数を教えてください。
- 1-7-1. 幼稚園は、年少、年中、年長の学級数を、下の学年から「半角数字カンマ区切り」で記してください。該当がない学年には「0」を入れてください。
- 1-8-1. 幼稚園は、年少、年中、年長の学級定員を、下の学年から「半角数字カンマ区切り」で記してください。該当がない学年には「0」を入れてください。
- ※「1-5. 複式学級」「1-6. 特別支援学級」は該当なし。

学級数に対する、常勤教員数、非常勤教員数の一覧

学級数	常勤数	園数	非常勤数
2	2	1	4
	5	1	2
	8	1	0
3	4	1	3
	5	6	3,3,3,5,5,8
	6	5	3,3,4,4,8
	8	1	6
4	5	1	7
	6	2	5,6
	7	1	3
	8	3	3,6,6

学級数	常勤数	園数	非常勤数
5	6	3	3,5,7
	7	4	3,4,4,4
	8	1	3
	9	2	3,4
6	8	5	3,3,4,6,7
	9	3	2,6,7

学級編成と頻度

年少	年中	年長	頻度
1	1	1	13
1	2	2	10
2	2	2	8
2	1	1	5
0	1	1	3
1	1	2	1
1	2	1	1

学級定員の分布

学級定員	年少	年中	年長
15以下	4	1	-
16以上20以下	15	2	3
21以上25以下	9	13	12
26以上30以下	7	16	16
31以上35以下	3	9	9
36以上	-	-	1
平均値	22.7	28.2	

全体的には学級数が増えれば担当教員の数も増えるという傾向はあるが、例えば、学級数3の園の常勤教員数は4~8名と倍の違いがあり、4名の園の非常勤教員数が3名に対し、8名の方が6名と多くなっている。また、学級数3で常勤教員数5名の園は6園あるが、非常勤教員数は3名が3園、5名が2

園、8名が1園と倍以上の違いがあるなど、学級数と担当教員数との相関はあまり強くない。非常勤教員の任用数は、その任用形態（フルタイム／パートタイムなど）にも左右され、全国的な人手不足の影響も大きい。それぞれの幼稚園の人員配置を見直すご参考までに。

「学級編成と頻度」には各学年の学級数のパターンを、「学級定員の分布」には各学年の学級定員範囲とその頻度を示す。（例えば、「学級編成の頻度」の1番上は、13園が全学年1学級であることを示している。また、「学級定員の分布」の1番上は、学級定員が15名以下の学級は、年少では4園に、年中では1園にあり、年長では無いことを示している。）

近年、2年保育の希望が減少傾向にあることを反映し、全体の半数程度が完全3年保育となっていた。「学級編成と頻度」において、「211」や「222」は殆どが完全3年保育であった。ただ、3歳児学級がない園も3園あるなど、少子化のあおりを受け、幼児教育を取り巻く環境は厳しさを増していると言える。

「学級定員」は、年少で「16以上20以下」が、年中・年長では「26以上30以下」が最多であった。学級定員の平均値は、年少22.7、年中・年長合わせてのものが28.2であり、幼児教育に適した人数に収斂しているようにも見える。ただ、少子化の影響は大きく、年中・年長で「20以下」が1割弱ほどあるが、今後この数値がどのように動くのか注視していきたい。

**1-9. 幼稚園で満3歳受け入れや、預かり保育をされている園は、その状況（人数、時間など）を記してください。**

「満3歳児受入状況」（2園）、「預かり保育実施状況」（9園）を、以下に示す。前者は未だ取り組みが一部で始まったばかりであるが、後者は北海道、関東、北信越、東海、近畿、中国、九州と、全国的に展開されている。預かりの終了時間は16時半から19時と幅があり、早朝・休日対応も園によって違いがあるなど、預かり保育のニーズが多様化し、それに対応していることが分かる。時間を含めた提供できるサービスは、常勤教員が担当するのか外部委託できるのかなどにも大きく左右されるので、教員の業務改善や研究業務との両立なども考えると、預かりの状況も含めた情報共有が今後の課題である。

・満3歳児受入状況

R5年度定員6、R6年度より定員12名。保育時間9:00～13:00  
R4年度より定員15名。保育時間7:30～18:30。長期休みも実施。

・預かり保育実施状況

定員	時間
15～20名	14時～16時半
40名（15名程度利用）	保育日：降園時間～17時（長期休業中：9時～17時）
20名（実際は25名も）	保育日：降園時間～17時（保育日以外に対応なし）
—	保育日：降園時間～17時（保育日以外に対応なし）
40名	降園時間～17時 最大延長17:45
15名程度	8時～18時（長期休業中も実施）
15名以上	平日：降園時間～18時（長期休業中：9時～18時）
24名	7時半～18時半（長期休業中も実施）
18名	7:40～8:40と14時～19時（木曜日は12時～19時）

**1-2. 小学校、中学校**

1-1. 学校種を教えてください。

1-2. 常勤教員数を教えてください。管理職も含みます。

1-3. 非常勤教員数を教えてください。

1-7-2. 小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、義務教育学校は、各学年の学級数を、下の

学年から「半角数字カンマ区切り」で記してください。

1-8-2. 小学校, 中学校, 高等学校, 中等教育学校, 義務教育学校は, 各学年の学級定員を, 下の学年から「半角数字カンマ区切り」で記してください。

小学校と中学校の全学級数と常勤教員の数, 非常勤教員の数の一覧を下表に示す。表の見方は「1-1. 幼稚園」と同様である。小・中学校とも, 全学級数と常勤教員数との相関関係は幼稚園と同様, それほど明確ではなかったが, 両者の相関は, 幼稚園→中学校→小学校の順で強くなっていた。非常勤教員数は学校により様々であった。

1-2. 学級数と教員の数 (小学校, 中学校)

小学校				中学校			
学級数	常勤数	校数	非常勤数	学級数	常勤数	校数	非常勤数
12	17	4	3,5,6,10	6	14	1	9
	18	4	3,4,5,6		18	1	12
	19	5	1,4,4,7,7		24	1	3
	20	4	2,3,6,10	9	15	1	2
	23	1	18		17	3	4,5,8
	26	1	2		18	5	4,6,6,8,8
	27	1	7		19	2	6,7
13	25	1	9		20	2	6,8
15	28	1	3		21	2	1,2
18	23	1	10	10	26	1	6
	24	2	5,7	12	22	4	3,4,4,8
	25	3	2,11,13		23	12	2,2,2,2,3,5,5,5,5,6,11,12
	26	4	3,4,5,9		24	5	5,5,6,8,9
	27	2	5,10		25	1	2
	28	4	3,5,5,8		26	3	2,3,10
	29	2	5,8		28	3	4,5,8
	30	2	0,13		30	1	14
19	26	1	3		31	1	8
20	29	1	3		32	1	2
	33	1	34	15	29	1	5
21	36	1	6		30	2	5,13
22	31	1	6				
24	30	1	6				
	35	1	6				

下表に小・中学校の学級定員の分布を示す。最下行は各学年の平均学級定員である。

小学校の学級定員は, 下限 26 名, 上限 35 名で, 平均値は, 1 年生が 33.5 名, 2~6 年生はほぼ 34.0 名, 全学級の 70% が 35 名定員であった。法定の上限 (1 年生 35 名, 2 年生以上 40 名) より 5 名程度少ない数で運用されており, 年次進行で定員削減が進んでいることが分かる (太字)。

中学校の学級定員は, 下限 32 名, 上限 40 名で, 平均値はほぼ 36.5 名, 学級定員 35, 36, 40 名が, 全体の約 25% ずつあった。法定の上限 (40 名) での運用が多くあり, 定員削減も小学校に比べると進んでいないようである (太字)。

各学年の学級定員分布（小学校，中学校）

小1	小2	小3	小4	小5	小6	校数	中1	中2	中3	校数
26	30	30	30	30	30	1	32	32	32	3
26	35	35	35	35	35	1	34	34	34	3
28	34	34	34	34	34	1	35	35	35	16
30	30	30	30	30	30	4	35	36	36	1
30	30	30	30	30	34	1	36	36	36	13
32	32	32	32	32	32	5	36	40	40	1
32	32	32	33	33	33	1	38	38	38	1
32	35	35	35	35	35	1	40	40	34	1
34	34	34	34	34	34	1	40	40	40	14
34	35	35	35	35	35	1	36.5	36.6	36.5	←平均
35	35	35	35	35	35	32				
33.5	34.0	34.0	34.0	34.0	34.1	←平均				

1-5. 複式学級の有無についての質問です。

複式学級は、全校種の中で、小学校でのみ設置があった。回答のあった6校の状況を下表に示す。1校は帰国子女教育であったが、残り5校は2学年ずつ組にした3学級で、学級定員は概ね国の基準に沿った16名（学年当たり8名）であった。

1-5. 複式学級の設置状況

複式	学級編成	定員
小学校	1・2/3・4/5・6 複式の3学級	
	1・2/3・4/5・6 複式の3学級	1学級16名
	1・2/3・4/5・6 複式の3学級	1学級16名
	1・2/3・4/5・6 複式の3学級	1学年8名
	1・2/3・4/5・6 複式の3学級	8名
	3・4 帰国子女教育学級	8名

1-6. 特別支援学級の有無についての質問です。

特別支援学級の設置は、小・中学校とも5件の回答があった。それらの状況を下表に示す。小学校は2学年ずつの複式で、中学校では学年ごとに1学級設置されていた。学級定員は概ね4~8名で、通級指導教室の設置は小学校の1校だけであった。全国的に見て、特別支援学級の設置は少ないことが分かる。しかし、附属学校園自体のニーズや特別支援教育についての情報発信なども視野に入れ、通級指導教室の在り方や特別支援学校との連携などについて考えていくことも必要であろう。

1-6. 特別支援学級の設置状況

	学級編成	定員	通級
小学校	2・3/4・6 複式の2学級	1学年2名	なし
	1・2/3・4/5・6 複式の3学級	若干名	なし
	1・2/3・4/5・6 複式の3学級	1学級8名	なし
	1・2/3・4/5・6 複式の3学級	1学年4名	なし
	1・2/3・4/5・6 複式の3学級	1学年4名	特別支援学級とは別に通級指導教室を設置
中学校	各学年1学級 帰国生徒学級	15名	
	各学年1学級	1学級6名	なし
	各学年1学級	8名	なし

	各学年 1 学級	1 学級 8 名	
	各学年 1 学級	1 年生 4 名, 2 年生 8 名, 3 年生 7 名	

1-3. 高等学校, 中等教育学校, 義務教育学校

- 1-1. 学校種を教えてください。  
 1-2. 常勤教員数を教えてください。管理職も含まれます。  
 1-3. 非常勤教員数を教えてください。  
 1-7-2. 小学校, 中学校, 高等学校, 中等教育学校, 義務教育学校は, 各学年の学級数を, 下の学年から「半角数字カンマ区切り」で記してください。  
 1-8-2. 小学校, 中学校, 高等学校, 中等教育学校, 義務教育学校は, 各学年の学級定員を, 下の学年から「半角数字カンマ区切り」で記してください。

表に高等学校, 中等教育学校, 義務教育学校の学級数と常勤/非常勤教員数, 学級定員の一覧を示す。表の見方は「1-1. 幼稚園」と同様である。

高等学校では, 同じ学級数でも常勤教員数が 1.5 倍程度違うなど, 学校による違いが大きい。学級定員は, 高等学校と中等教育学校ではほぼ 40 名であり, 義務教育学校は 30~35 名となっている。  
 ※中等教育学校と義務教育学校は, 前期/後期の設定など, 他校種に比べて多様性があり, 設問と回答とにミスマッチを含む可能性がある。設問の在り方等については今後の課題としたい。

1-3. 学級数と教員の数, 学級定員 (高等学校, 中等教育学校, 義務教育学校)

校種	学級数	常勤数	校数	非常勤数	学級定員
高等学校	9	23	2	7,14	高等学校 40 名 9 校 →平均値 40.0 中等教育学校 30 名 1 校, 40 名 3 校 →平均値 37.5 義務教育学校前期 30 名 1 校, 32 名 2 校, 35 名 2 校 義務教育学校後期 32 名 1 校, 35 名 2 校 →1 年生平均値 33.0 2 年生以上平均値 33.4
		24	1	19	
		35	1	9	
	12	28	1	15	
		29	1	13	
		45	1	9	
		46	1	14	
15	39	1	6		
中等教育	18	42	1	12	
		45	1	25	
		47	1	10	
	24	51	1	35	
義務教育 9 年	21	34	1	9	
	27	47	1	25	
		56	1	6	
義務教育 6 年	12	20	1	1	
義務教育 3 年	9	21	1	5	

#### 1-4. 特別支援学校

- 1-1. 学校種を教えてください。
- 1-2. 常勤教員数を教えてください。管理職も含みます。
- 1-3. 非常勤教員数を教えてください。
- 1-7-3. 特別支援学校は各学部の学級数を、下の学年から学部名と共に「半角数字カンマ区切り」で記してください。
- 1-8-3. 特別支援学校は各学部の学級定員を、下の学年から学部名と共に「半角数字カンマ区切り」で記してください。

特別支援学校の学級数と常勤／非常勤教員数の一覧を下表左側に示す。見方は「1-1. 幼稚園」と同様である。また、学級定員の分布を下表右側に示す。こちらは、「学部」名の右側の数字が「定員」、( )内の数字が該当する学校の数を示している。(例えば、小学部の学級定員は3, 4, 6の3通りで、「3」の学校が9校、「4」が1校、「6」が20校である。)

多くの学校が、学級数9、常勤教員数30程度と、規模が揃っている。学級定員は、小学部・中学部の多くが6名で、高等部の多くは8名となっていた。学級数9の学校が最も多いが、常勤数は17名から33名と大きな差がある。その中でも常勤数が29, 30名の学校が最も多い。また、非常勤数は、2～7名と大きな差はない。

1-4. 学級数と教員の数 (特別支援学校)

学級数	常勤数	校数	非常勤数
9	17	1	2
	25	2	4,5
	29	6	0,2,3,4,4,7
	30	5	2,2,4,4,5
	31	1	4
	32	1	3
	33	1	5
10	30	1	3
11	30	1	0
18	34	1	1

表. 学級定員の分布

学級定員 (該当数)	
幼稚部	3 (1)
小学部	3 (9), 4 (1), 6 (20)
中学部	3 (2), 5 (1), 6 (27)
高等部	3 (1), 6 (2), 7 (1), 8 (25)
高等部専科	6 (1)

※設問には「1-4. 特別支援学校は障がい種別を選んでください。」とあったが、「国立大学附属特支は知的障がいのみ」とのことであった。ただ、主たる障がいが「知的」ということであって、実際は複合的に障がいを抱えている子ども多数在籍している現状もある。そのような状況も踏まえ、現場の苦労を共有できるよう、質問項目の検討を進めたい。



## II. 望ましい学級定員

### 2. 望ましい学級定員

#### 2-1. 幼稚園年少

#### 2-2. 幼稚園年中，年長

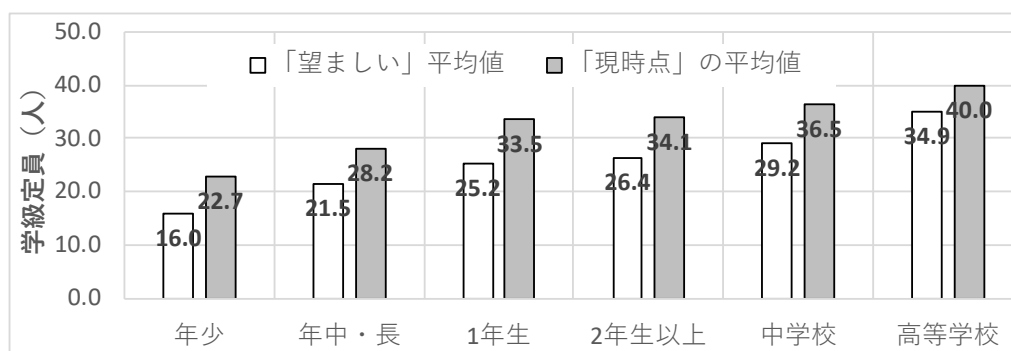
#### 2-3. 小学校1年，義務教育学校1年

#### 2-4. 小学校及び義務教育学校の2年以上，中学校，高等学校，中等教育学校

「望ましい学級定員」の分布を下表に示す。「人数」欄の斜体は幼稚園のみを、太字は幼稚園以外を対象とした選択肢項目である。表の下部には、各分布を中央値（「16人以上20人以下」は18、「15人以下」は13、「36人以上」は38等）で代表させて算出した「望ましい」平均値、「【2】1. 基本調査」に示した「現時点」での各校種区分の平均値を示す。また、幼稚園から高等学校までの「望ましい」学級定員と「現時点」のものと関係をグラフにも示す。

### 2. 望ましい学級定員

人数	年少	年中・長	小1年	小2年以上	中学校	高等学校	中等教育	義務1年	義務2年以上
<i>15人以下</i>	20	1							
<i>16人以上20人以下</i>	17	13	5	3	3	0	0	2	1
21人以上25人以下	4	24	21	17	7	0	1	2	4
26人以上30人以下	0	3	18	22	21	1	2	0	0
31人以上35人以下	0	0	4	7	17	3	1	1	2
<b>36人以上</b>			0	0	4	4	2	0	0
「望ましい」平均値	16.0	21.5	25.2	26.4	29.2	34.9	31.3	23.0	25.1
「現時点」の平均値	22.7	28.2	33.5	34.1	36.5	40.0	37.5	33.0	33.4



望ましい学級定員は、幼稚園から高等学校へ、学齢が上がるにつれて「望ましい」、「現時点」共に平均値が大きくなっていくが、全ての学齢において「現時点」の方が「望ましい」よりも5~8人ほど大きい値となっており、実情と現場の感覚との乖離が全体的に生じている。特に小学校においては差が8名程度と最大となっていた。ただ、2019年度のOECD諸国の公立小学校の平均学級規模は21.1と、小学校の「望ましい」平均値よりも更に5人ほど少ない。そのようなことも踏まえて、附属学校園が学級定員を戦略的に見直す必要があるのではないだろうか。

#### 2-5. 2-1~4を考える際、特に大切だと考えた観点を選んでください。

「望ましい学級定員」を考える際に重視した観点の、校種別の選択分布を下表に示す。太字は各学校園における50%以上の選択を示す。

2-5. 「望ましい学級定員」を考える際に重視した観点

観点	幼稚園	小学校	中学校	高等学校	中等教育	義務教育
①授業中、クラス全体の状況を、きちんと把握できる	23	38	39	8	3	4
②安全管理を考えた場合、責任を持って／無理なく目を配れる	33	36	31	5	2	4
③個々の児童・生徒の生活面での状況を、毎日きちんと把握できる	26	38	32	1	1	3
④子どもたちが、集団で学び合いながら成長できる	34	40	35	7	1	5
⑤ゆとりを持って授業の準備・片付けができる	9	18	9	3	2	3
⑥個々の児童生徒の形成的評価を行うことができる	9	19	17	3	2	4
⑦学級内で子供同士のトラブルが起きても、しっかりと対処することができる	18	27	23	2	0	2
⑧保護者と丁寧に向き合うことができる	25	24	24	3	1	4
⑨子どもたちの幸せに寄り添うことができる	22	16	13	3	0	1
⑩円滑な教育実習指導のために望ましい	5	14	7	3	0	1

幼小中では①～③の「様々な場面における児童生徒の状況把握」や④の「子どもたちの集団で学び合う効果」の選択率が高く、殆どが6割から8割程度となっている。①～③は、幼児児童生徒を学校園として管理する立場から、④は学習効果という視点から数値が高くなっているものと思われる。また、⑦⑧の「子ども同士のトラブル対応」「保護者対応」の選択率も高い。高等学校では、①の9割弱、④の8割弱が突出しており、授業中の対応への意識が高いことが伺える。これらから、校種による違いはあるが、授業指導や生活指導、学級経営といった教員の本務を考えた場合、現行の学級定員は多すぎるとというのが教員の実感のようだ。学級定員の削減が提案される度に、そのエビデンスとして学習成果を求められるが、その評価は容易ではない。ただ、子どもの変容だけでなく、学びの場を提供する側の先生方の実感も、環境改善のためのエビデンスに資するのではないだろうか。

⑨は幼稚園で5割以上の選択があるが、小学校、中学校と、学齢が上がるに連れ低下している。現在のOECDのミッションは単なる経済的成長ではなく、人々が心身共に幸せな状態（ウェルビーイング）を作り出すことへと移行している。子どもたちに「どうして勉強しないといけないの？」と問われたときに「君たちの幸せのためだよ」と胸を張って言えるような環境構築を、附属学校園から発信できればと思う。本調査のデータを元に、各附属学校園における積極的な議論を期待したい。

2-6. 学級定員が減った場合、予算面ではマイナスの影響が生じます。学級数は現在のまま、学級定員が仮に24名になったとしても、学校園の運営は問題なくできますか。

表に、「学級定員が24名になっても学校園の運営に問題はないか」問うた回答分布を示す。また、「①そう思う」を5点、「⑤そう思わない」を1点として回答を数値化し、求めた平均値を表の最下行に記す。

2-6. 学級定員が24名になっても学校園の運営に問題はないか

	幼稚園 (41)	小学校 (49)	中学校 (52)	高等学校 (9)	中等教育 (6)	義務教育 (7)
①そう思う	12	6	5	0	0	3
②ややそう思う	11	13	7	0	0	1
③分からない	10	12	11	3	1	2
④あまりそう思わない	5	9	17	1	0	0
⑤そう思わない	3	9	11	4	5	1
平均値	3.6	3.0	2.6	1.9	1.3	3.7

平均値を見ると、幼稚園では3.6と肯定的回答が大多数であったが、小中高と学齢が上がるに従い数値が低下し、中高では否定的回答が肯定的回答を大きく上回っていた。

**2-7. 学級定員が減った場合、学級数を増やして学校園規模を維持する対応も考えられます。教員数が確保されるとすると、そのような対応は望ましいでしょうか。**

「学級数を増やして学校園規模を維持する対応」についての回答分布を下表に示す。2-6と同様に平均値を取ったところ、幼稚園は3.6と同じ値であったが、小中高でも肯定的評価が上昇し、高等学校では4.0と一番高い値を示した。附属学校の使命(先進の研究機関, 教員養成機関としての教育実習の受け皿, 地域連携, 地域奉仕)の観点で考えると、単に学級の人数を減らして学校規模を小さくするのではなく、児童生徒数を維持し、クラス数増の分を教員定数を増やして対応したいということだと思われる。

2-7. 学級数を増やして学校園規模を維持する対応に対する意見

	幼稚園	小学校	中学校	高等学校	中等教育	義務教育
①そう思う	15	14	14	4	3	2
②ややそう思う	6	12	11	3	1	0
③分からない	10	3	7	0	0	1
④あまりそう思わない	8	11	14	2	0	2
⑤そう思わない	2	9	6	0	2	2
平均値	3.6	3.2	3.3	4.0	3.5	2.7

**2-8. 特別支援学校の学級定員について、課題に感じられていることなどありましたらご記入ください。**

出された意見を下枠内に列記する。子どもによる違いが大きく、また、実習対応等の業務の増加傾向もあり、定員内であっても対応が難しい場合がある、というのが共通の悩みとして上げられている。このような意見を集約し、学校現場において先生方が状況に応じて柔軟な対応が取れるよう、情報活用を勧めていきたい。

2-8. 特別支援学校の学級定員についての課題

小学部は、2クラスで学年の幅が大きい。専攻科まである学校であるため、教員の定数や教室の課題がある。

学級の教員の定数2名と決まっているため、定員内であっても実態幅が大きい集団になったときに支援体制の組み方が難しいときがある。

支援の頻度が高い児童生徒が多くいる学年では、担任に負担感がのしかかる。特に高等部の学級定員数に臨機応変さを学校に持たせていただくと加配等で対応している。

児童生徒の実態によって、最適な、適切な学級の定員がかわってくることも考えられるので、「この人数でなければならない」となると、厳しい場合もある。目安として考えられるとありがたいですが、そうはいかないことは理解しています。

小学部が複式学級であるが、学年ごとの教育課程が組みにくくなっている。

障害の程度にも関係するが、学級定員6や8に対して、教員2名で対応するのが難しい状況が増えてきている。

設定している教育課程に適する実態の児童生徒の集団を作ることが難しく、定員数だけの問題ではないと感じています。

定数については、現状維持でよいと考える。ただ、障がい状況の多様化や重度化傾向を考えると安心して安全な学習環境のために教員の配置数の増員が望まれる。

年間に実施する教育実習の受け入れ人数を考えた場合には、少ないと感じることもある。

